

組織的・継続的に食教育を実践する方法

～ 箸名人をめざして ～

1. 設定理由

食教育の実践において、組織的・継続的にとりくむことが重要であると考え。しかし、実際には個人による単発での実践になることも少なくないのが現状である。

食教育の計画を工夫し、抽象的な目標ではなく具体的な目標とすることで、組織的・継続的な食教育の実施につながるのではないかと考える。

そこで、実践を通して組織的・継続的に食教育を実践する方法を示したいと考え、本主題を設定した。

2. 研究仮説

- (1) 計画を前年度に検討することで、より計画的に実践ができ、年度内に次年度の計画を検討することを継続することで、計画性のある食教育の実践ができるであろう。
- (2) 目標を具体的にすることで、数値目標の設定が可能となり、組織的な実践ができるであろう。

3. 研究内容

- (1) 具体的な目標と、その目標達成のための指導計画の作成。
- (2) 職員との連携による組織的な食教育のあり方。
- (3) 目標達成に向けての実践。

4. 結論

- (1) 前年度のとりくみにより新年度の活動が円滑なものになることが分かった。次年度への継続性を図る上では、校内組織の活用が特に重要である。また、給食委員会を活用し児童を主体とする活動にすることで継続性の強化が図れた。
- (2) 具体的な目標を設定することで、組織的な食教育に繋がることが分かった。教職員が関心を持ちやすいテーマであったことも協力を取り付ける一因であったと考えられる。

1. 研究主題

組織的・継続的に食教育を実践する方法

～ 箸名人を目指して ～

2. 主題設定の理由

食教育の実践において、組織的・継続的にとりくむことが重要であると考え。また、千葉県学校教育指導の指針にも記載されていることから、食教育を推進していく者の多くが、組織的・継続的に実践することが重要であることを理解している。しかし、実際には個人による単発での実践になることも少なくないのが現状である。

そのような背景から、食教育を組織的・継続的に行うためには、栄養教職員がどのように関わることが効果的であるか考えるようになった。

組織的に実践するためには、まず校内の教職員の協力が不可欠である。また食教育の内容を精選し抽象的な目標ではなく数値化することが可能な具体的な目標とすることで、教職員が協力し組織的に実践しやすくなるのではと考える。更に食教育の実践には計画性が重要である。その計画を工夫することで、継続的な食教育の実施に繋がるのではないかと考える。

そこで、私の長年思っていた食教育における夢の一つである「箸を正しく使う」ことのできる児童を増やしたいという思いから、「箸の持ち方」についてのとりくみを通して組織的・継続的に食教育を実践する方法を示したいと考え、本主題を設定した。

また、このとりくみを通して児童が「箸の持ち方」を習得する過程でやりがいや達成感を抱き、食への関心のきっかけとなるような、とりくみにしたいという私の思いも主題設定の理由である。

3. 研究目標

- (1) 食教育を継続的に実践するために、どのように計画を活用することが効果的であるか、またとりくみをどのように実践するかを提案すること。
- (2) 食教育を組織的に実践するために、具体的な目標を設定することで、より組織的な活動の実践が可能になることを提案すること。

4. 研究仮説

- (1) 計画を前年度に検討することで、新年度のスタートが円滑になり、組織的に実践ができ年度内に次年度の計画を検討することを継続することで計画性のある実践につながるであろう。
- (2) 食教育の内容を精選し、具体的な目標とすることで、組織で協力してとりくむことが可能となり、より組織的な実践につながるであろう。

5. 研究内容

- (1) 具体的な目標と、その目標達成のための指導計画の作成。
- (2) 教職員との連携による組織的な食教育のあり方。
- (3) 目標達成に向けての実践。

6. 研究の実際

(1) 柏市の現状について

柏市では、平成28年の1月15日の広報に「子ども健康プロジェクト」を立ち上げることが公表された。このプロジェクトは、心身ともに健康で「生きる力」がある子を育てるという目標があり、また学校給食の魅力を地域に発信するために、様々なとりくみもしている。とりくみの例としては、子どもたちが学校で食べている給食のメニューを料理研究家や民間企業の協力を得て発信する。また、親子料理教室で給食メニューの調理体験をするといったものである。

市内では学校給食を活用した食育の推進に対する追い風が吹いている状態である。

(2) 箸の持ち方について ～箸を正しく持てる児童100%～

① 栄養教諭としての思い

箸の持ち方については、小学校卒業までに持てるようになって欲しいとの思いがあった。また食教育の中には、児童の努力ではままならないことや、保護者が関わる面も多くある。児童の努力で実現できるもの、また知識ではなく技能（スキル）として何か児童に残してあげたいという思いもあった。箸の持ち方がきっかけとなり、広く食への関心を持つ児童が増えるのではないだろうか。また、見られることが多い箸の持ち方だからこそ、早い段階で正しい持ち方を身に付けさせたい。そういった思いから、食教育の一環として箸の持ち方についてとりくむことにした。

② 管理職・関係職員（給食主任）との打ち合わせ

28年度の人事や校務分掌が決定する前であったが、27年度末に次年度に向けての打ち合わせを実施した。管理職との打ち合わせでは新しい校務分掌の立ち上げを提案した。栄養教諭・給食主任・各学団から1人ずつからなる「健康プロジェクト委員会」という校務分掌が28年度から新設されることになった。

給食主任とは事前に指導計画（資料1）の検討を行い、具体的な目標として箸の持ち方について実施することにし、数値目標は箸を正しく持てる児童100%を掲げることにした。そして全体計画の重点目標として「箸の持ち方」について位置づけることにした。

箸の持ち方の習得だけでなく、箸を正しく扱えるようにするため検定の実施や、箸を持てるようになった児童が箸を持ってない児童に持ち方を指導すること、また、給食委員会を活用することで、児童が主体となるとりくみとしていくことを協議した。

これらの内容について健康プロジェクト委員会でも協議し、職員会議で全体への周知を図った。今年度も28年度と同様に年度末に次年度への調整を図ることで継続したとりくみとして実施中である。また、「健康プロジェクト委員会」についても継続することが決定した。

③ 教職員への周知と共通理解

28年度は前年度3学期の職員会議において、指導計画について提案をした。人事異動で教職員の入れ替わりも予想されるが、次年度4月から計画を実践するためには前年度の提案が必要だと感じる。しかし、この時点では新設される校務分掌については、提案することができなかった。その点については課題を残すことになったが、指導計画についての共通理解を前年度のうちに円滑に図ることができたのは、事前に管理職と打ち合わせをしたことが大きかったと考えられる。今年度も同様に28年度末に指導計画（資料3）の提案をした。28年度の活動を振り返り、計画を修正し提案することができた。また、2年目ということもあり、提案は職員にスムーズに受け入れられた。

（3）28年度からの実践

① 実態把握

新年度となり、新しい教職員に指導計画等について再提案をした。計画に沿って箸を正しく持てる児童がどの程度いるのか確認し、実態把握（資料2）をした。

前年度に一度提案している内容なので、提案自体は円滑にできた。実態把握については学級ごとの温度差もあり、提出が遅くなる学級もあった。

また、課題として学級での確認方法に基準を設けていなかったのも、箸が持てるという基準をどのようにすればよいか分からないという声もでた。また、担任が正しく持てない場合や正しく持てているか分からない場合のサポートについて考える必要を感じた。

さらに、担任が間違っただけを正しい持ち方と誤認識している場合に児童に間違っただけの持ち方が指導されてしまうことについても危惧しておくべきであった。

現実的には、本校のように規模の大きな学校（児童数約940人）では、年度当初に足並みをそろえて全学級で実態を正確に把握することは困難である。そこで、今年度は実態としては不完全だと思われるが昨年度のデータを流用することにした。



② 新たな校務分掌（健康プロジェクト委員会について）

28年度は健康プロジェクト委員会において、給食主任と各学団の教職員からの意見をとりまとめ、その内容を職員会議に提案した。

箸の持ち方については、給食委員会を活用し、正しい持ち方の教え方を習得させることで、箸の持ち方を伝承していける児童の育成を目指していくことも目標とした。

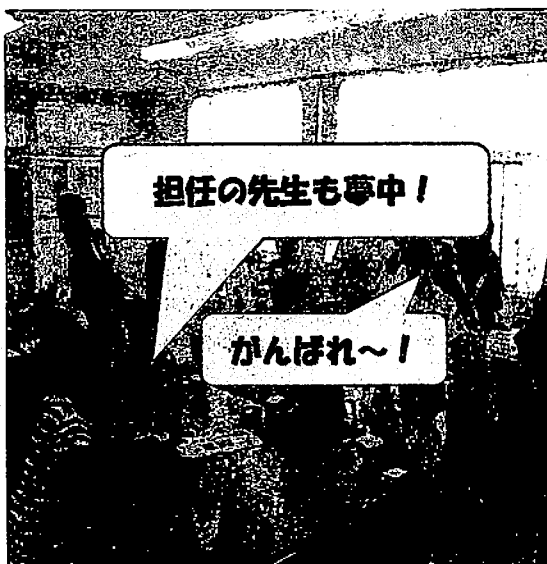
今年度は給食主任と連携しての活動が中心になっている。2年目となり健康プロジェクト委員会を通さなくても職員の協力体制が確立してきたからである。

③ 箸検定について

28年度の3学期より、箸検定を実施した。計画の遅れもあり高学年のみの実施となった。学校の年間行事予定を考慮し、実施可能な時期を早期に見極める必要があることがわかった。検定にはフジッコ株式会社の「まめっ子くん」という教材を活用した。給食委員会の児童が主体となり実施できたことで関心は高くなったと考えられる。また、検定の際に箸が正しく持てているかの確認が困難であった。

29年度は、学期ごとに実施することにした。学年の実態から、低学年は2学期からの実施とした。給食委員の役割を細分化し、検定員の係と箸の持ち方を確認する係を作った。検定の前に持ち方を確認し、正しく持てている児童には名札に金のシールを貼り、それを検定の受験資格とした。検定での結果は専用の名簿に記録し一括管理することにした。

給食委員会専用の印鑑も作成し、検定終了後は学期末までに段位に応じた認定証も給食委員会から発行することにした。



(箸検定の様子 平成29年度)



(認定証作成の様子 平成29年度)

③ まめっ子くん大会の参加について（平成29年 7月27日 開催）

小学校対抗豆つかみゲーム「まめっ子くん」大会に参加した。3人のチームを作り参加するルールだったので、箸検定の最高段位である名人位を持つ6年生の中から参加希望者を募り、選抜を行った。

全国から8校が集まっての大会であったが、本校は準優勝することができた。



(まめっ子くん大会 代表選抜の様子)



(まめっ子くん大会の様子)

7. 結論

(1) 前年度から計画を作成することで、新年度の活動はスムーズなものになることが分かった。また、前年度に管理職を含め年間計画を検討することが大切であることが分かった。次年度への継続性を図る上では、校内組織の活用が特に重要である。

しかし、実際は計画通りに進むことはなく、軌道修正が必要であることが分かった。新設された校務分掌が軌道修正においても非常に有用であった。2年目ということもあり、よりスムーズに活動ができるようになり、給食主任との連携のみで実践が可能となった。その反面、健康プロジェクト委員会は名ばかりの組織になってしまった。これは、健康プロジェクト委員会を通さなくても食教育の推進に職員全体が協力的になったことが原因の一つと考えることもできる。

(2) 具体的な目標を設定することで、校内の教職員が協力して実施することができ、組織的な食育に繋がることが分かった。本研究では箸の持ち方についてをテーマにしたが、鉛筆の持ち方と箸の持ち方の関連性から教職員が関心を持ちやすいテーマであったことも協力を取り付けの一因であったと考えられる。また、学級差はあったが昨年度から継続していることで箸検定についても、給食委員会の活用も含め組織的にとりくむことができた。

名人から選抜して、「まめっ子くん大会」への参加ができたことも組織として協力してとりくめた結果と考えられる。

8. 成果と課題

(1) 成果

前年度に計画を作成することで、4月の提案とほぼ同時に食教育活動をスタートできるようになったのは1つの成果だと考えられる。また、事前に管理職や給食主任と指導計画を検討しておくことで、新年度人事で校務分掌に変更があった際も影響が小さくなる。また健康プロジェクト委員会という新しい校務分掌が立ち上がったことで、28年度の食教育はスムーズに実践できた。29年度も名ばかりではあるが、残すことができたのは成果である。

箸の持ち方についてのとりくみは、28年度の課題から年間計画を修正し実践できた。計画性のある食教育として、給食委員会の児童を主体としてとりくめたのは大きな成果と言える。特に、2年目である今年度は給食委員会に第一希望で入る児童が9割を超えていたこと、また前年度の給食委員の児童から希望したが人気があり、なることができなかったという声があがったことなど、児童が箸の持ち方への関心を強めていることが見てとれた。

目標については、箸の持ち方は数値で状態を把握しやすく、全員が箸を持てるようにするということを目標にすることで、指導の進捗が目に見えるようになった。箸を持てるようになったあとも、検定を通して箸名人をめざすことができるとりくみ内容にできたことは成果と言える。また、箸検定の認定証やまめっ子くん大会への参加を通して校内での箸の持ちへの関心が高まってきていることも成果の一つだと考えられる。

また、まめっ子くん大会での成績について全校集会で表彰されることで校内に周知され大会での写真等も掲示されることになった。

3学期には箸を用いたイベント（発起人は本校校長）の開催を計画しており、今後も盛り上がり期待できる。

（2）課題

28年度は前年度から計画して実施したが、計画の時には予想できなかったこととして、箸の持ち方のチェックにかかる時間が計画よりも多くかかったということがあった。このことから、実態把握が遅れることで指導計画が予定より大幅に遅れてしまった。

健康プロジェクト委員会の発足が4月の後半までかかった。その原因として、前年度に新設される校務分掌について提案できなかったことが考えられる。組織の発足の遅れが計画の遅れに繋がった可能性も高く、次年度に向けての課題となった。

また、箸の持ち方の実態（資料2）について、3学年と2学年で逆転が起こっている。チェックを担当する教職員のチェック方法に差があった可能性が考えられる。チェックの基準に差がでないように検討する必要があると感じた。

29年度は、計画に若干の遅れと変更があるが、箸の持ち方の指導のとりくみは順調である。しかし、健康プロジェクト委員会の活用方法については改善の余地があるように感じた。

また、箸検定自体が自由参加であるので、箸が持てないことを理由に参加できない児童もいる。今年度は箸が持てないことを気にすることも、箸の持ち方に興味があると考えらることでプラスにとらえてもよいが、箸を持つことができるようにするという目標の成就のためには箸検定に参加することができない児童への対策が必要だと感じる。

組織的なとりくみについては、指導の実践の中で教職員の協力を得られている実感はあるが、箸検定の参加率についても学級のばらつきが大きいのが現状であり、協力的な学級と、そうでない学級について原因がどこにあるのかを確認する必要性を感じた。

資料

平成28年度 箸の持ち方年間指導計画

柏市立柏第五小学校

第1

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
計画		箸の持ち方チェック (～6月中旬)		箸の持ち方の指導		箸の練習(下旬) 検定の内容発表(下旬) (昼休み)
活動内容		箸を正しく持つことができるか、学級で確認。(担任) (%で出す) 【5月の重点目標】 箸の持ち方について指導。 (学級活動)	箸の持ち方の指導方法について検討する。 (健康プロジェクト委員会)	学級で箸の持ち方の指導を実施する。 ※必要に応じて栄養教諭とT.Tで実施。	箸の検定内容について検討する。 (健康プロジェクト委員会)	箸の持ち方の練習ができるように昼休みに給食委員と一緒に実施。 (家庭科室等) 検定の内容、方法を発表。
	10月	11月	12月	1月	2月	3月
計画	箸の検定・練習 (昼休み)	五小まつり 「箸のチャンピオン」 箸の練習 (昼休み)	箸の検定・練習 (昼休み)	箸の練習 箸の記録会(給食週間) (昼休み)	箸の検定・練習 (昼休み)	箸の持ち方チェック 次年度に向けて
活動内容	箸の扱いについて検定を実施。 箸の持ち方の練習ができるように昼休みに給食委員と一緒に実施。 (家庭科室等)	P.T.Aと協力して箸の持ち方に関する取組を実施。 (五小まつり)	箸の扱いについて検定を実施。	箸の腕技を実施。 (給食週間の取組)	箸の扱いについて検定を実施。	箸を持つことができる人の数を%で確認。  今年度を振り返り、次年度につなげる。

資料2

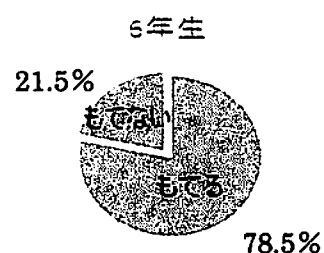
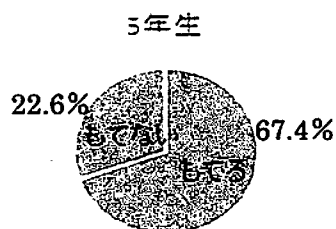
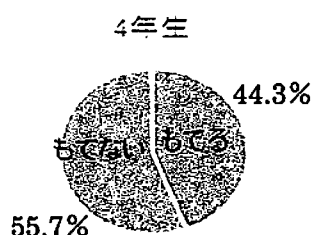
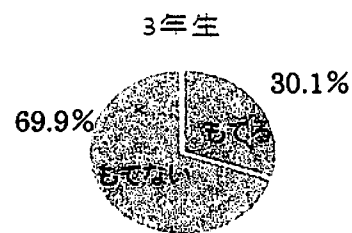
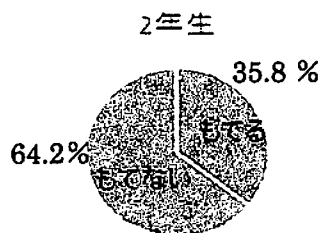
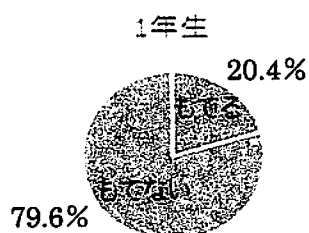
箸の持ち方チェックの集計結果

28年度

健康プロジェクト委員会

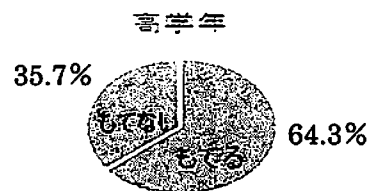
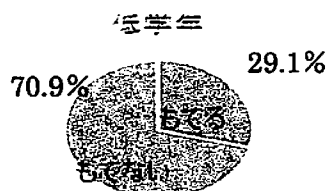
1. 学年ごとの状況

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
もてる	32	64	50	66	94	124
もてない	125	115	116	83	41	34



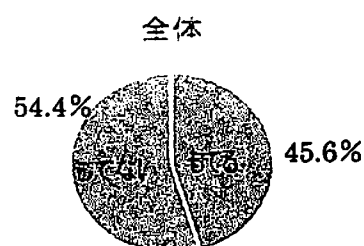
2. 低学年・高学年の状況

	低学年	高学年
もてる	146	284
もてない	356	158



3. 全体の状況

	全体
もてる	430
もてない	514



	4月	5月	6月	7月	8月	9月
計画	箸の持ち方チェック (4月～5月中旬)	箸の持ち方の指導	箸の検定・練習 (昼休み)			
活動内容	箸を正しく持つことができるか、学級で確認。 (担任)(栄養教諭)	【5月の重点目標】 箸の持ち方について指導。(学級活動) 箸の持ち方の練習。 (家庭科室等) (希望学級のみ)	【食育月間】 箸の検定を実施。 各学年3回程度 (低学年は状況をみて 実施方法を考える)			箸の持ち方の練習。 (家庭科室等) (希望学級のみ)
	10月	11月	12月	1月	2月	3月
計画	箸の検定・練習 (昼休み)	五小まつり 「名人王決定戦」		箸検定・練習 (昼休み)		箸の持ち方チェック ※状況により6年生のみ検定を実施。 次年度に向けて
活動内容	箸の検定を実施。 各学年3回程度 箸の持ち方の練習。 (家庭科室等) (希望学級のみ)	名人を集めチャンピオンを決める。 (仮)名人王決定戦 (五小まつり)		箸の検定を実施 各学年3回程度		箸を持つことができる人の数を%で確認。 ※次年度からは4月は1年生のみ持ち方チェックをする。 →年度を振り返り、次年度につなげる。